岐阜林業

大正六年三月二十五日　第八十九號　（毎月廿五日定期刊行）　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

目次

▲講演
愛山先生講演

▲論說
林業の工業化
副業に代へて

▲雜報
學校記事
校友會記事
其他

講演

山路愛山先生講演

左は去る二月二十一日信濃日々新聞主筆愛山山路先生が我校友會論部の招待に應じ來校講演せられたる大要を筆記せるもの也先生の校閲を經ず文責全く記者に在り讀者之を諒せよ（筆記者、山下、岩田二生）

エー去年火星の事を研究する學者の死んだ事を諸君は新聞で御承知でせう、其學者の云ふには火星の中には人間の樣な者が棲んでゐて大きな溝を拵へて居るそうです、勿論我輩は火星學者でないから其れが事實かどうかは知りません、而し今火星の中に人間が棲でんゐると假定し、其人間が此地球の人間を一疋捕まへて行つたとする、うして火星の人間が訊問を始めるとする「た前は一体何だ」「れれは地球上の人間で萬物の靈長だ」「た前の上に着けて居るものは何だ脱げるか」「之は着物と云ふもので脱げる」こゝで地球の人間は眞裸にされる「た前の指の先に着いてゐるものは何だ」「之は爪と云ふものだ」「さうかそんな薄弱なもので喧嘩が出來るか加之からだに寒さを防ぐ毛も生ゑて居らぬ若し槍か何かでヅブリとやられたらどうする夫でよくも萬物の靈長などと云へたものだ」「イヤ人間の萬物の靈長たる所以は身体ではない身体の第一等に強いは獅子、虎など云ふ猛獸だが我々人間は精神に於て總てのものに優れて居るのだ」よろしい、それならうの精神を試驗してやろう、一体お前の棲んでゐる地球は太陽の周圍を幾日で回るのだ」「三百六十五日餘」よく知つて居るネさらば三百六十五を二つ掛け合せて幾ら」此に至つて人間は少しくあわて氣味になり紙と鉛筆を貸し與へられん事を嘆願するそこで火星の人の云ふ樣「紙と鉛筆とは固より人間に屬するものでないのだ夫がなくては計算が出來ぬとは情ない夫れでは今一つ質問するが地球上の元素は皆で幾つか」「八十七」「よし然らば其元素の化合量は何程だ」此に至つて人間又々あわて出し「それは化學書といふものに書いてある其本を見なければ分らぬ」と答へる、うしこで火星の人間の云ふには「何だ人を馬鹿にして居る、うんな事で萬物の靈長とはよくも云へたものだ」と嘲弄する、かく云へば如何にも人間は價値なきつまらぬ者であります、が而し之は個人としてゝあります、個人が集りて團体を作り社會を成し相依り相助けて協同の生活を營む時に始めて大なる價値を生ずるものであります大學の博士でも西洋料理に連れて行き紙と鉛筆を持たせずにシチウが何錢何厘フライが何錢何厘ビスフキが幾らと數十種の計算をやらせたら中々計算の出來るものではない、文明人でも單獨で野蠻國に行けば元の野蠻に返るに違ひない、然らば人間の價値

は社會國家を成して相依り相助ける處にあると云ふべきである是は決して吾輩一個の說ではない、英國のベンヂャミンオットといふ人は世界進化論を書いたが其中に人間の能力と云ふものは古と今とで大した違ひは無い只人間社會の組立が上手になつた許だと云うてゐる、之が眞理だと思ふ、此頃米國の大河ミツソリーに橋を架けたが前以てスツカリ組立をして置いて愈々之を架ける時にはタツタ十五分時で虹の如き大橋が架けられたと云ふ事である、衆力を合せ構成を上手にやる結果は此の如く偉大なものである、

此に依りて之を觀るに人間の價値は國家社會を造る上に於て始めて現はるゝものと云ふべきである、個人としても勿論價値はあるが特に國家社會を構成する上に於て最も價値があると云ふのである、併し今日僕の云はんとする所は國家社會の力ではない大に個人の力を說かんとするのだ、只個人の向て働く方向は國家社會全体でなければならぬ、人間は個人として働くが其目標とする所は人類全体でなければならぬ、諸君、國家社會と一個人とはどちらが重いでせうか、勿論、國家社會の方が重いと考へるであらうが併し場合によりては然りとも答へ難い、例へば世の中の制度法律は誰れが作りしかと云ふに之は社會の人が皆で拵へたと云ふが其最初は或一人の偉人が考へ出したのである、併し一人許では之を國家の制度法律とする譯にゆかぬ、之を賛成する人が大勢あつて始めて一國の制度法律と爲つたのだ、故に一個人、國を造り一個人、國を破るとも云へるのだ、即ち「一人、仁ナレバ二國、亡ニ興ル」ものである、故に一個人は時としては國家全体より重しとも考へられる、偖、之より國家を善き方に向けて行く個人の力を考へて見よう。

國家と云ふものは常に新しく新しく變つて行くものである、新しくなると云ふ事は進歩を意味する「周ハ舊邦ト雖モ其命、維レ新ナリ」とある如く國家は常に新しく創造せられなくてはならぬ、諸君のからだでも同じ事、創造が止めば死ぬ時である、我が日本國の歷史はどうであるか神武天皇が御創業になつて日本の國と云ふものに一つの大なる勢をあたへ之が基となつて幾多の變遷を經ながらも新しく新しく創造せられつゝ來つた、國体の貴いのも此處にあるのだ偖此世の中に無くてはならぬ個人に三樣の個人がある、其一つは物を創める人である、何事に依らず新しい事を創める人がなくては進歩と云ふ事はありません、例へば此に一つの會議があつても皆が默つて居て意見を述べる者が無ければ何時迄立つても解決はつくまい、然るに其時議長「私は斯う考へますと云つて意見を述べる、すると之に次いで一人二人とだん〳〵可否を言ひ出し始めて會議が生きて來て完全に終るのである、之は一例にすぎませんが始めて事を云ひ出し又すると云ふ事は極めて大切な事は諸君はた認めでせう、併し此物事を創めるといふ事は中々困難なものですせ夫は人間と云ふものは横着なもので惰性によりて動いて居るから今休んでゐるものに立てと云うても肯かない、又今歩いてゐる者に止まれと云つても肯くものではない、夫故物事を創める人は往々人に惡まれるものです、吉田松陰なども此爲に身を誤つて

かくすればかくなるものと知りながら
やむにやまれぬ大和魂

と歌つたのです、而し我心、至誠なり皇天后土、我を憐み給ふと信ずるならば、たとひ死んでも其感化影響は後世を動かすものがある、古の戰爭などは誰か最先に進まなければ戰は始まらぬ、然るに勇猛果敢の士があつて死を決して最先に一番槍を入れる、すうすると外の將卒が之に相次ぎて進擊し此に開戰となつて而して天下の事が定まるのである、今日は斯樣な山の中まで科學の恩惠を受けて居るのであるが今より數十百年前日本人が始めて和蘭語を讀み出した時はどうであつたか世人よりは判天連の切支丹の魔法のと色々の批難攻擊を受けたものである、而し當時の蘭學者は衆に率先し百難を冒して研究したのである、即ち杉田玄白や前野良澤など云ふ人は我は文明の一

番槍をすると云ふ考で闢學をやつたのである、今日斯樣の山の中まで科學の恩惠を受けて居るのは全く斯樣の人々の賜である、夫れ故、物事を創める人を猥りに惡く思うてはならぬ、彼の全世界を風靡してゐる基督教も始めは田舍百姓の倅のイエスといふ人が一人で考へ出し言ひ出した事であるのだ、この樣に大なる文明も其始めは必ず衆に秀でたる唯一人の力によつて生み出されるのである、故に吾々が生を此世に享け意義ある生活をなさんとする以上は必ず人に未だ知られぬ新しき仕事を創めなければならぬ、苟も神武創業の御精神を無窮に續ける爲には國民が物を創める精神がなくてはならぬ、が併し、新しい事を言ひ始める丈で世の中が進歩するでせうか、諸君之は考へものですせ又新しい事を云ひ出す人があつて夫に賛成する人許で本統にすぐれたよい事が出來上りませうか、試みに諸君太陽を御覽なさい諸君は太陽は宇宙の一体であると云ふ事は御承知でせうが昔は神樣として有難がつたものです、夫はうであつたでせう初めて太陽を見た時は隨分美しいものであつたと思ひます、夫であるから驚いて神樣にして仕舞つたのですうの神樣から宇宙の一体といふ今日の考に變つて來るには隨分困難であつたでせう、最初太陽は神でない、宇宙の一体であると證據を立てゝ論ずる人があり、其れに賛成して信ずる人もあつたが保守主義の人は大に反對したのである、かくて混沌たる論戰となつたが遂に今日の樣な考に定まつたのでありますが諸君が若しあの寒い北極へ半年も行つて居て御覽なさい半年は眞暗の中で暮らして半年目に彼の極光を眺めた時うれは非常に美しく見ゆるでせう昔の人が神樣と思つたのも無理はないでせう、斯樣に新奇な事を云ひ創める人があり更に之に對して反駁する人があつて其處に立派な考が始めて成り立つのである、事を創める人は往々極端に流れ易いものである彼の蘭學者の中には隨分亂暴の者があつて人の親と云ふのは何だ、あれは人のムケ殼だと罵つたと云ふ話もある、故に誰か事を創める人があつたら又之を論難する個人がなくてはならぬ、彼の衰世凱が大威張で帝王にならうとした時支那四百餘州の人々が皆賛成々々で同意したならとんでもない事が起りますが、あの時、それはいかん、うんな工合にはどつこい行かぬと云ふ人が大勢出て來てあんな工合になつたものです。偖始めて事を云ひ出し新しい事をするのは夫は〳〵わらく六ケ敷ものですが、一人ではどこでも出來にくい是非其說を押し通さうとすれば武力が必要である新しい事を創めた人は大抵わらい迫害を蒙つたものだ、大勢でワアッ……と云つて押しかける時は無手では、どうとも手の出し樣はありません、此反對迫害に對しては實に劍の力即ち武力が肝要ですせ、併し武力許でもいけない、地形地勢といふものも中々關係して居る、新しい事を云ひ出して又相當に武力が備つて居るとしてもた隣の支那の樣に「淮南ヨリ江南ヲ望メバ千里、碧山相對ス」といふ樣な平原國では小勢は勿論大勢には敵し難いのである、うれで支那では斯樣な時の常套手段として「簞食壺漿シテ軍ヲ迎フ」と云ふ事になつて自然に事大思想と云ふものが養はれてくる、然るに我國は此點では實に都合がよい即ち全國到る處山骨稜々として居つて方々に關所がある、大勢でワアッと押しよせて來ても通れぬ、所謂「一夫關ニ當レバ萬夫モ開クナシ」で能く小を以て大を防ぎ得たのである從て日本國民には强を挫き弱を扶けると云ふ義俠的精神が涵養された、之は主として我國の地形が其因をなして居るのだ、諸君「地ニ處セザル人ナシ」と井ふが人間も瓜や南瓜と同樣地を離れる事は出來ない、日本國民に獨立不羈の精神があるのは此地形に因る事が多いのです、

事を創めるのに對して之を論難する事が必要であるのは前述の通りであるが只之を論難攻擊する丈では困る、創めれば壞し創めれば壞し丁度昔の小說にある鰻の昇天のやうなもので際限がつかぬ、信州なども大分議論は好きなやうであるが、取纏めはどう

であらうか、斯樣に兩々相對して始末のつかぬ場合に兩方の議論を調和し統帥する個人。が必要である我輩の先輩亡故人になつた本多庸一君などは中々事を取り纏めて行く事が巧であつた、僕等は此男の前に行くと不思議に議論も出來なくなります、之は一つの天才でせう、僕がよほど前に宗教の雜誌を頼まれて七年許此男と一所に働いて居る中に厭になつたから廢めようと思つて西洋人に申出まするとそれ西洋人の云ふには君が今廢めると云ふなら會計の二十五圓許の欽損をうめて其上でやめて貰ひたい、と云ひましたので僕は癪に觸つたから西洋にはうんな無法な事があるかも知れないが日本にはうんな法は無い七年間も勤めて居たものが廢めると云ふ際にアベコベに其者に金を出させると云ふのは殘酷だと憤慨して居ると其處へ本多君がやつて來て、マアマアと云ふ事で歸りには銀座の蕎麥屋へ連れられて行き天麩羅か何か二杯程振舞はれ其件はツイ其れぎりとなつて仕舞つた、博徒の喧嘩なざは親分の一言で双方シャンとする日本國民は仕合の事には如何なる紛糾せる問題でも忠君と云ふ二字の前には容易に解決されて仕舞ふ、萬歳の聲の下には國民は我を忘れて統帥せられる、之は實に國粹の有り難き處である、此の如く世の中を進歩せしめ調和せしめる爲には統帥者が甚だ必要である

然らば統帥者の性格、は如何にあるべきか、と云ふに第一に不得要領なる事が必要だ、何となれば中央に立つ人が四圍の人悉くを滿足させると云ふ譯には參らぬ、旗幟を鮮明にすれば必ず不都合な事が生ずる、夫故どうしても不得要領ならざるを得ない、德川家康などは極めて不得要領の人であつた、而し「天何ヲカ言ハンヤ四時行ハレ百物生ズ」又「雄辯は銀也沈默は金也」とも云ふではないか、家康は生來の吃音であつた、夫故言うても分らぬ、無言も同樣である、夫だから家康のわ側には話の聞き役が二人付いて居つた、本多忠勝が嘗てわれの主人も一向分らぬ人で困ると言うて嘆息した事があるが其後立身して十五万石の大名になつた時始めて悟つたものと見わ我位の大名でも不得要領にせぬと下を治め兼ねる、まして我主人の如き天下を預つて居る人は尚更の事である、主君の不得要領なのは尤もの次第だと云うたそうである、而しかく言へばとてワザト不得要領を裝うても駄目である、鵜は色が黑くても鵜の眞似は出來ない。然らば統帥者は不得要領であれば其丈で宜しいかと云ふに夫丈では不充分である、今一つ衆人を統帥するに必要な事は人に信ぜられる事である、「人に信ぜられるには如何にすべきか、「君子ハ屋漏ニ恥ヂズ」「隱レタルヨリ顯ハルヽハナシ」とある如く隱れたる所にても天に恥ぢず地に羞ぢない樣でなければ駄目である、人が人を信ずると云ふのは一のカンのやうなものである鳥を擊たうと思つて覘へばスグ分ると見わて逃げて仕舞ふ、至つて無智蒙昧な奴でも人の心中を見て取る事は間違はない、「人ノ己ヲ見ル事、肺肝ヲ見ルガ如シ」である、隱れたる所に於て誠といふ德を實行するでなければ到底人に信ぜられる事は出來ない、此心の底を見拔くのは智惠でもなければ感覺でもない、一種の本能である、小兒を御覽なさい、父母にはどんなに折檻されても父母を戀ひ慕うて止まぬではないか、是れ父母にはその心の底に子を愛すると云ふ至情が溢れて居るからである、是に至りて吾人は宗教に歸らなければならない、眞に人を心服させんには隱れたる所に於て誠を實行するでなければならぬ、夫から今一つ人を心服させるには總ての人間を世話してやると云ふ精神即ち總ての人を他人とは思はぬと云ふ所謂、慈悲仁心がなくてはならぬ家康は勤もすれば古狸など惡口されるが日本人が皆彼に心服して居たのはどう云ふ譯でせう、家康は非常に丈夫の人で六十九歳の時鷹狩の序に駿河の國のセナ河と云ふ河で眞裸で水泳をしたと云ふ事である是に因つて見ても極めて健康の人であつたと思はれるが其後、藤枝に狩をした時、何か新しい料理が食べたいと云ふので鯛の天麩羅を試

みて夫に中てられて病氣となつた多分胃癌でもあつたらう

夫から長い間、病床にあつて最早起たざるを知つた時に二代將軍秀忠を枕許に呼びよせて、おれが死んだら天下は如何になるだらうかと問うた、すると秀忠もさるもの言下に大人死なば天下將さに大に亂れんとすと答へた、そこで家康も意に叶つたと見わて善しと滿足の意を示された、夫から家康は更に秀忠に向つて云ふには天下亂るとも之を治むるは汝である、天下を治めるには慈悲が最も大切であるぞと戒めた、是が恐らく家康の本音であらう、世人は家康をズルイ、狡イと云ふが我輩はうは思はぬ矢張家康に此慈悲、天下の人を他人と思はぬ心があつたから天下を取る事が出來たと思ふ

前述の如く世の中が進歩發展するには、先づ事を創める人、之に反對する人、夫から之を調和統帥する人此三樣の人があつて始めて成就するものである、而して此心は何に宿るものですか國家ですか個人ですか、勿論之は個人に宿るものであります、さて諸君現代に於て群集の力は偉大なるものである、ドドドドドッと鬨の聲をあげてやつて來る時には何物も之には敵はないのである、ナポレオンでもビスマークでも輿論の力には叶はぬ、此の如く輿論の力は强いものであるが其れは總べて正しいものでせうか之は大に疑問であります、否輿論は愚かでありますが、群集の力は盲目でありますが、夫故此群集の中に偉人があつて群集の力を指導して始めて其力が正しい立派なものになるでせう、かう云ふ風に考へて來ると個人の力は前に述べたものとは反對に實に偉大なものであります、即ち國家は個人に依つて安泰となり又進歩發展もするのである、楠正成が後醍醐天皇に謁見した時、正成一人生存すと御聽きなさらば天下は憂ふるに足らずと云つたではないか、何たる大言であるか併し國家社會も一個人の力によりて左右せらるゝと云ふ事を適切に表明したのである。米國の教育家は、是からの教育は群集の力を聰明なる個人の力によりて指導する樣にせねばならぬと云うて居ます、諸君、諸君も學校を出られた後は群集の中に飛び込み、個人の力を九地の底にうち立てゝ國家社會を進歩向上させなければなりませぬ、僕の演說は之れ丈と致します(拍手)

論說

林業の工業化

宇紫生

○題目が少し妥當を欠くかも知れないが近時著しく林業家の工業家化せんとする趨向が眼に付く最近關西方面を一寸觀察した處に依つて見るも明かに其狀勢を看取しうる

勿論工業の都會集中が更に地方分散に向ふ際殊に林產工業の如き原料の運搬力弱きものが益々地方に移動するのは理の當然であるかも知れないが。然して又經濟界の順調と戰亂の影響が遂に茲に及んだ爲であらうが林業家の工業化が顯著なる勢を以て進展して行くのは爭はれぬ事實である

○玩具の研究が林業官吏の問題となり「如何にして驚を鳴かすべきか」迄に至りたり木精、氷醋酸の製造が林業家の手になつたり曲木工藝、竹製美術器の製作が林業者の企劃に屬するのは林業界の進展であり林業家の奮勵であるのは事實である即ち欣幸とすべき狀態であるけれども然し稍々輕佻なる態樣を持して居ないかと思ふ官界から脫して民間の事業界に入るを以て名譽とし得意とする時勢の必しも欣ぶべからざる趨勢でないかと思はれる

○一面其天分とする處の林野經營狀態を顧みしか病菌に災せられて本秋以後の杉山行苗は未曾有の大打擊を受けて居るにも係はらず之が應急策、善後策に就て誰人が如何なる苦心を拂ひ如何なる劃策をなしつゝあるか

炭價の騰貴に伴ふ薪炭材の濫伐は之亦從來見ざる處の慘狀を現出しつゝあるに係らず之に對する警戒の聲も覺醒の音も本縣の如き一向聞く所でない

◎林業と云はず政治家と云はず多くの人が眞摯を欠き浮薄の徴候を表示しつゝあるのは時局の爲に輩出する成金輩の行動に見て明であり國家の爲憂惧すべき事象ではあるまいか、徒らに新しがり濫りに新企畫を喜び（然も夫が新工夫新考案にあらずして先進地の眞似であり乍ら）只利得を急ぐが爲に林業家が工業家化せんとする趨向は吾人の斷じて嫌忌せざるべからざる事である

◎云ふ迄もなく運搬力弱き林産をして加工し工藝的操作を加へて收入を多からしむる努力は何處迄も之を推奬し勸誘しなければならぬけれども唯世の時流に連れて生產の本業を忘れて之が破壞をなすに等しい處の利用に沒頭するのは林業家たる處の本質を欠ける所業である

◎さらぬだに林業官界の過去及現在は吾人のあきたらぬ幾多の事項が存在する、植物成長の原理から推しても將又鄉土の上から推究しても行はるべからざりし暖國產種の大々的奬勵を加へて拭ふべからざる失敗の跡を關東、北陸、東北の山野に留めた然して又官職の威信を失墜せしめ更に又林業官界の生命の如くに呼號した部落有林野の統一が内務省系統人士の非難容嘴に對して忘れられたるが如くに放棄せられたる處あるが如き或は又無我夢中的に礎石の奬勵をなして暴落に逢ふや忽然として迷夢より醒めたるが如き茫然自失の憐むべき狀態を呈せるが如き數へ來れば其本質を深慮せざる輕擧盲動は縷壓を禁じ得ないものがある

◎繰返して云ふ吾人は林業家の工業添加は健實なる方面に於て或は製材所の兼營、木綿の製造其他の工藝的兼營を進展せしむる事に於て最も其必要を主張するものであるが現代の政黨の如く虚僞的、カラクリ的、不眞目な際物に類した集團を嫌ふ如く時局的な一時的な山師的な不眞摯なる工業家化を嫌忌しなくてはならない

（連日の雪は累積して丈余に及び一歩を轉ずれば即ち屋根の上に至る「煙出より人間が降る」説話の僞らざるものなることを確む而して此下に逢平ありと記されなければ人屋が何程あるか知るに由がない聽講生は何れも輪カンジキを穿きて來る十八年來の大雪、今初めて越後の越後たる眞景に接す　三月二日夜、雪の中にて）

祝辭に代へて

——新しき卒業生諸兄へ——

丸山岩吉

「祝辭に代へて」かゝる表題は其實吾欲する所ではない。僕は此が諸兄に捧ぐる唯一の祝辭の心算である。事實僕は祝辭として筆執つた。しかし此を其儘『祝辭』なる表題を附して本誌上に掲げるは、聊滑稽の感あるものがあつた。少くとも吾心持に於いて。で不本意ながらも「に代へて」と附け足した。此を豫め御承知の上御讀下あられんことを切望する。

今一つ前以つて御斷したいことは此文体である。諸兄に捧げるものなる以上、少くとも「あります調」位使ふべきであつた。僕いかに蒙なりと雖も其位のことに氣付かんでも無い。がしかし僕には別の考へがある。僕は通一片の形式よりも、より多く自己の調子を尊んだ。吾調子をなるべくよく出すには如何なる形式を選むべきか。これが吾文体選擇上の箴言である。今も亦此によつて此を選んだ。これが全然禮を無視したものとされても致方ない。とはいへ僕は文章の有する禮儀とは、そが形式なりと斷せしむるを好まない。僕は諸兄を眼下に見下し、以つて此を草せんとは夢思はぬ。唯いふ、此が吾好む最上の形式だとは欠にも出さぬ。

以上は本章の性質及形式に就いての自己註釋である。餘り多くを斷る感あるが、今一つ是非言はねばならぬ事がある。そは吾態度である。態度といふより立場である。或一部の人々は「先輩」てふ榮譽ある稱號を自ら奉るだらう。僕は「先輩」などいふ不遜なる文字を冠し以つて諸兄に見ゆるを自らにして恥づ。授業料完納期の一年や二年の早晩を以つて、先後輩の別を立てんとする程僕は貴族的でない。貴族的てふ語に弊ありとせば、潔よく封建的なる文字に代へる。何れにしても僕はさることを好まん此場合僕は一學友として兄等に見ゆる。これをまづ念頭に置いて貰はう。僕は吾寸志を誤らるゝを忌み且嫌ふ。勿論僕は過去に於けるが如く、現在に於けるが如く、又將來もさせんと思ふが如く、必ずしも吾眞價を認めて貰はうとは願はぬ。とはいへかゝる場合、不遜などゝ誤認さるゝは吾潔とせざる所、爲めに一應自家辯護を試みた。

諸兄と僕とは僅々一年しか、日を同じうすることなかつた。先づ以つて御緣の薄いに近い。しかし諸兄の去られた后の吾母校は、殆んど知らざる人のみによつて充さるゝてふ大なる事實をひかへて居る。僕は此事實に想到した。想到して眞に涙含まるゝを覺えた。此が此執筆の主因である。

卒業の祝すべきや否やは、見樣によつて幾議論を生ずる。が通一片に解釋して喜ぶべきなるは事實である。僕は諸兄の卒業を大いに祝する。しかし其祝福は、當然を祝する祝福で、奇蹟を祝する祝福ではない。卒業なる文字を偶像化し、卒業なる事實を奇蹟化し、以つて諸兄の卒業を祝さんとする程、愚なる僕でも無い心算で居る。

「木曾山林學校は海內唯一の林學專門の實業學校なり。」これはた世辭でも自惚でもない事實である。しかし其海內唯一を誇る木曾の卒業生も、他の農林學校の卒業生も一旦社會に出た上は、皆御同樣と見做さるゝは、あまりに悲しい皮肉である。「吾こそは天下無双の劍客なり。」と嘯く大先生の其の實「瓢簞に逃げた」腰抜武士と、互角以上に出なかつたてふ皮肉な滑稽と選ぶない「そは汝の無知より來る誤信なり。」と駁するか。不幸にして僕も既に二十年と九ケ月を此世に生きた。朝に生れ　夕に死ぬる蜉蝣の眼にも、此世の姿が映つたとすれば、吾如何に蒙なりと雖も、かゝる長きを生きたる以上、其周圍の概略位は判つた筈である。然るにも係らず僕は未だ曾て「木曾出は違ふ。」てふことをた世辞にも聞いたことがない。否聞かんではない。一度聞いた。眞に一度。山梨縣は甲府の町で。しかしそれすら吾々のもつて光榮となすには、尙々遠いものであつた。此の方面のかゝる範圍に止まるに反し、一方かの皮肉な處置は隨所に見られる。何は兎もあれ、かゝる皮肉を誰が言はした。言つた人にも罪あらう、が言はした人にも罪がある。吾々は言つた人の罪を問ふ前に、言はした者の罪を問ふ必要がある。

諸兄は木曾出身の故を以つて、其專門的知識の豐富を誇らうとするか。それが抑々誤である。事實木曾出身の人々は其專門的知識に於いて、他の同種のものに比し優るとも劣らないであらう。知識は尊ぶべし。其知識の豐富眞に尊ぶべし。しかし現今の社會にあつては、所謂下級林業技術員の學殖はあまり重要視せられてない。といふのは、彼等は其專門的學殖を傾到してかゝる程難かしい問題に關與することは無いからである。といつて重要視せられていないといふことは、直ちに不必要だという意味ではない。事實專門的學殖は大いに必要である。其各作業上の規程を理解する上に於いて、又實地作業上の常識的處置に於て其專門的學殖は必要である。しかしそれはどちらかといへば、潜在的に働くことで、大いに他人の眼を驚かす程の直接的結果を示すことは出來ない。そういふ譯から一般がらさう注意されることがない。で專門的知識の豐富といふことは、誇つてもいゝことだろうが、良官吏たるの資格には直接の大影響を持つとらん。だから官吏として立つ上に於てて、專門的知識の豐富を鼻にかけるは、どちらかといへば一般的の眼から見て、不換紙幣の豐富を誇るやうな滑稽さがある。（此の意味を誤解して貰つては困る。此の意味は、官吏たる以上もはや專門的知識の向上を計る必要が無いといふことでは勿論ない。）

專門的知識以上に官吏としての資格を上下するものがある。それは其の者の人格である。官吏としいへば、怠惰なもの、傲慢なもの、諛ふもの、誤魔化すものと解さらるゝは、今も昔も同じである。又事實に於ても此傾向甚しい。かゝる言を聞き、かゝる事實を知つて、直ちに官吏としての生き

方は此のみに限られたりと結論するは、質に過ぎたる處置である。これに逆つた道も官吏の執るべき方針として、十分承認の餘地がある。一般風潮の外に立つは、誰しも特異と此を見る。官吏にして、勤勉にして傲慢ならず、阿諛なく、眞面目であつたならば、他の所謂た役人樣より特異と見らるゝは爭ひ難き事實である。彼等がその特異を何と評するかは別問題であるが、彼等とても相當の教育を受けたるもの、官吏としての眞の德義が何物なるやは知悉する、故に口前で何と言はうとも、其心の何處かに、一片尊敬の念を持つは事實である。殊に吾見る所にして誤無くんば、近時の官界は(舊時の官界については何もしらんが)著しく人格尊重の傾向を生ヤた。所謂腰辨根性の破產期が來たとはまだ〳〵言へん。とはいへ其反面。此の風潮著しく高まつたは事實である。吾木曾の先輩が「木曾出は違ふ」といふ定評を受けしめて置かなかつた理由は此に存する。彼等は鄕に入つて鄕に從ひ過ぎた。若し彼等にして、其賢明振を發揮する今少し扣へ目にしてあつたなら、吾蘇校の榮譽は今少し高まつて居つたらうさうして前言つた皮肉は幾分和いで居つたらう。斯ういつてくると彼の松樹庵氏が「木曾山林學校氣質」を提唱したことの、如何に意味深かつたかを思はざるを得ない。氏の木曾山林學校氣質」の內容には、僕としては全的承認を與へることは出來ないが、他の軍人上りや巡査上り若しくは饅上りの役人と、全然區別するなき迄成り果てた吾官界の同胞諸兄には、眞に一清涼劑たるを失はなかつた。僕は今日よりして尙氏の意氣と熱情とに十二分の讚美を捧げるものである。かゝる讚稱すべき提唱も「吾厚顏なる官界の同胞諸兄からは、一瞥すらも與へられなつたらう。假令與へられたとしてもその結果は、賢明な——然りあまりに賢明な嘲笑以外に出なかつたらう。

諸兄よ、諸兄の所謂先輩は此の如きものであつた。諸兄は其後進たる蘇校出なることを誇ること勿れ。しかし兄等は母校を愛せよ。母校の名譽のために自重せよ。官界に搖動する新曙光を、兄等によつて花咲かしめよ。少くとも其意氣あれ。其意氣によつて贏ち得た經驗は、此れを兄等の後進に諭せ「信用ある技術員は此を木曾に求めよ」かゝる語をして一般林業界の通用語たらしむることはかゝつて新進の兄等にある。

以上を官界に或は他の林業界に、技術員として行く人々のみにいふ。僕は更に語を變へて、諸兄中の或人々に一言呈し、以つて此の破格な祝辭を終るとしよう。

諸兄の中には隨分年若い人々もあらう。法律上にては成年の未成年との別を立てる未成年者は獨立して行爲する能力がないかゝる區別を立てたことは根據あつてのことであつて、決して單なる便宜上からのことではない。行爲の能力なき未成年者が何が故にこり「生の大計を爲し得ようぞ。諸兄のうちの大半は、外部からの慫慂か若しくは漠然たる考のみよりして、吾蘇校に來られたらう。此の事實なるは第三者たる僕が斷ずる斷じて。一歩も引かん。それ等の人々の中には、一母校に學ぶ間に林業の有難味がわかつて、眞に一生を林業技術員として送らうと願ふ人も亦少なくはなからう。が又中には自己の個性を知り入社會の狀態を知るにつれて、密かに身蘇校に入つたを悔ゆるに至るものあらう。うの人々よ。兄等に僕は一言呈する。僕は兄等に衷心同情する。歷史に徵するに兄等の如き人々の多くは、徒らなる運命觀に入り過ぎた。兄等は尙は決してかゝる恐を學び給ふな。兄等は尙若い。蘇校に來たを通れ難き運命と觀じて澁々林業技術員たるの愚を避けて、自己の眞に希求する方面に新しき努力を開始せよ三十迄は準備時代として許される。眞に三十にして立つたと假定せよ。人生八十年として尙前退五十年の活動時代あるに非ずや七十八にして首相たりし人あり、兄等何を以つてか八十迄活動する能はずと觀ずる。木曾から齒科醫が出た。印刷屋が出た。此等は兄等にとつていゝ手本である。また純然たる醫學士も出た。また哲學宗敎研究のため渡米した人も居る。兄等が貧乏人の子

だらうとは、失禮ながら僕は察する。金持の子が何の物好きに木曾あたりへ來るものか。しかし貧乏人の子には何も出來んか。より多く逆境には立つだらう。けれ共何にも出來んとの結論には、僕としては走れない。努めよ努めよ。新しき光明に向つて走れ。成る成らぬはこれ時運。唯努めたてふことのみで、兄等は既に無意味な生を送つた人では無い。僕は諸兄のうちから異色ある奮鬪家の出られんことを望む。うは當然の理に立つ事實なるが故に。(此の意味は必ずしも高程度の學校に入れといふことで無いこと勿論である。)

更に、一旦は林業技術員たらんことを志し、官界若しくは他の林業界に入つた人々も、現實との衝突によつて、現實の非を悟ることあつたなら、又新しく轉向せよ。新しき進路を定めて猛進せよ。かゝる事實を或先輩は腰掛と難じた。腰掛か、腰掛か、兄等は唯自己に忠實なれ。

總ドて、向上的なれ、唯向上的なれ。常によりよきに向つて憧憬れよ。而して憧憬を憧憬としてのみ保つ怯者たる勿れ。吾も亦兄等の爲めに小さき道連れたらんと欲する。が不幸、僕はあまりに小さかつた。願みて自ら憐まざるを得ざる程、しかし吾は小さく弱い。自ら望みて得られざる大なる悲哀の、其幾分かを兄等によつて滿されんことを願ひ、此の拙い筆を握つた。

かう書き來つて見ると、豫期の三分すら寫し得なかつたことがわかる。うれがわかつてくると、自分の愚さが憐まれる。と同時に、かゝる拙きものを諸兄に捧げることに、多大の躊躇を餘儀なくされる。しかし一思ふことといはぬは腹ふくるゝわざ、といつて改めて起稿する興味も餘裕も吾にはない。矢張此の儘お贈りする。願はくは粗末なものとお受けあれ。それに例のふしだらから、草稿を作ることなしに直接にこれに書きつけた。爲めに論理や條理に大なる缺陷あることゝ信ずる。これも御承知の上お讀みあれ。

何は兎もあれ、これが全き意味に於ける兄等への吾祝辭である。阿諛とか世辭と、皮肉と冷笑とを全然抜きにした、吾誠意ある祝辭である。少くとも其心算である。幸にして此拙き一編から、吾微衷の幾分かを汲まるゝことあらば、吾は大いに心强う感ずるものである。

さらばよ兄等、再會の日ありや無しや。兄等よ、幸に健なれ、努めよ、努めよ。兄等の前途をして多幸ならしむると否とは、唯兄等の努力如何にあり。行けよ、行けよ停止するなき、又究極するなき生の戰に、さらばよ兄等、れゝ光るわ。兄等を導く星の光が。尊ふべき其星の光が。

學校記事

○愛山先生講演　二月廿一日校友會辯論會に於ては愛山山路先生を招待し一場の講演を聽けり其要旨は卷頭記載の如くなるが先生は短軀、肥大、樸茂たる顏容の中爛々たる眼光を備へ精悍の氣外に溢るるを覺ゆ講說一時間有餘に涉り其熱辯は滿堂の聽者を醉はしめたり當日は郡役所、町村役場、警察署、小學校其他よりの傍聽人多數に上り盛會を極めたり

○學年末試驗　本學年末試驗は三月九日開始、十七日終了の筈、證書授與式は廿三日也

○學則改正　本校學則改正に就き先般申請中の處、長野縣令第十六號を以て認可せられたり、卽ち左の如し

長野縣令第十六號

大正二年四月縣令第十八號木曾山林學校學則第八條中學科課程地每週授業時數表ヲ左ノ通リ改正シ大正六年四月一日ヨリ施行ス但本表施行ノ際ニ現ニ第二三學年ニ在學スル生徒ニ對シテハ從前ノ學科課程ヲ便宜斟酌シテ之ヲ定ム

大正六年三月二日　長野縣知事　赤星典太

學科課程並每週授業時數表

學年	第一學年		第二學年		第三學年	
學期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
學科目	課程 時數	課程 時數	課程 時數	課程 時數	課程 時數	課程 時數
修身	人倫道德ノ要旨 一	同 上一	同 上一	同 上一	同 上一	同 上一
讀書作文	國語漢文 作文習字 四	同 上四	同 上三	同 上三	同 上三	同 上三
英語	讀譯習字 三	同 上三	讀譯文法 二	同 上二	同 上二	同 上二
數學	代數幾何 五	同 上五	同 上四	同 上四	三角 二	同 上二
理化學	化學 三	同 上三	物理 三	同 上三		
博物	動物植物鑛物 五	同 上五				
法制經濟					法制經濟 四	同 上四
體操	普通兵式 二	同 上二	同 上二	同 上二	同 上一	同 上一
造林	森林植物造林本論 三	造林本論 三	同 上三	同 上三	造林各論 二	同 上二
森林保護砂防工			森林保護 二	同 上二	砂防工 一	同 上一
森林利用林產物製造	利用 二	同 上一	同 上二	同 上二	運材 林產物製造 五	同 上五
測量製圖	製圖 一	同 上一	測量 三	同 上三	同 上二	同 上二
森林經理數學	數學		森林數學 三	同 上三	經理 三	同 上三
林政、森林法規					林政 二 森林法規 二	同 上二
農業	栽培汎論 二	養畜 二	地質 二	氣象 二	土壤 三	肥料 二 農學通論 二
計	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

○征矢野書記退職　征矢野書記は今回病氣の爲本校を退職する事となり三月五日付左の辭令に接せり

長野縣立木曾山林學校書記兼教授嘱託
征矢野茂樹
願ニ依リ本職並ニ兼職ヲ免ス
同　上

給八級俸

○沼田書記心得就任　沼田給仕は三月五日左の通り辭令に接せり

沼田三郎
長野縣立木曾山林學校書記心得ヲ命ズ

校友會便り

○去る二月廿一日午前九時より本年度最終の辯論會に先ち例年の通り來年度校友會役員選擧を行ひたり其結果左の如し

出席人員百三十六名
（職員九名、生徒百二十七名）
投票總數百三十六票
內無効票數十一票
有効票數百二十五票

庶務部（三點者迄以下同じ）
一一四票　矢崎清海君
一〇一票　小林右內君
二〇票　伊藤芳郎君

辯論部
一〇二票　唐澤繁夫君
九八票　伊東厚君

二五票　松尾廣次君

雜誌部
九五票　横井正守君
八七票　小澤安親君
五六票　星加正雄君

剣部
一一一票　內田新之助君
一〇七票　今井忠雄君
一九票　月田喜代佐君

庭球部
九〇票　西尾彰君
八一票　廣瀨運平君
六六票　三村善三君

弓術部
一一二票　內山伊那登君
六八票　今井徹郎君
四八票　細窪友一郎君

遠足部
一〇一票　瀧澤銀次郎君
七四票　下島俊次君
五三票　井上寛一君

本年度最終の辯論會より

山下生

二月二十一日校友會役員選擧を了へて後直ちに本年度最終の辯論會が開かれた、外には雪がちらついて實に泣き出しさうな日であつたけれども論者の意氣も彌次の元氣も之れが爲には殺がれはしなかつた例に依つて本日の辯士の氏名を掲げ短評を試やう

○開會の辭　平田部長

○永生き　一年　大久保幸福君
体軀の小なること本校一、落村き拂つた態度は到底初陣とは思はれない、うして演題は忠實に研究した跡が見わた、辯論の練習と共に身体を鍛練して永生きし給へ

○偶感　一年　青木重俊君
元氣がなく聲が低い而し論旨は徹底して居つた

○生存競爭　一年　古畑貞一君
將來上達の概が見る、態度が確かりして居る動植物の關係から人間の使命といふことを分り易く述べた、以後どし〳〵出給へ

○鐵　二年　伊東厚君
度々の練習に近頃めつきり上達した內容は鐵でなくて鐵の樣な固い決心を以て事に當れとふ意味か?

○Never tell a lie　二年　北川春君
頗る聽者を引きつける態度と抑揚を持つて居る、氣取つた演題だが要するに誠心誠意たるべしとの論旨である

○信仰　三年　曾我義郎君
初で最後の演說「なぜもつと早くから雄飛しなかつたのか」今日の演說に感服して斯く惜まれずには居られなかつた

○失題　三年　鈴木繁君
大言壯語君の努力主義を皷吹し吾人は須らく强者たらざるべからずと論結した、言語と態度に何處となく力が漲つて居るを覺わた

○スケート倶樂部設置論　三年　赤羽三郎君
君として有り得べき論だ、熱心にスケートの効能を述べ立てたそして此處にもせめて御嶽の二の池位いの池があれば、と思はせた僕に——

○失題　三年　丹澤潔君
君も初めての最後の演說、始めから聽者を呑む概があつた、ユーゴーの傑作ラ、ミゼラブルを例に引いて愛を論じた、結末の締めくゝりがなかつたのは聊か物足らぬ感がした

○孔夫子　二年　唐澤繁夫君
雄辯家として校友が許して居るも道理だ、然し君の辯論は所謂沼々懸河の辯であつて解き去つた後に何等の印象を殘さぬ、即ち美文を棒讀みにしたやうな感がするのみ、君を愛するが爲に敢て言ふ

○勸勉克己　一年　和田常次郎君
校中の愛嬌者、練修したなら君は所謂人氣役者となる相を具へて居るフレー

○艱難說　二年　松尾廣次君
沈着な態度悠々迫らざる語調は優に校友屈指である、論旨も徹底してる、惜むらくは潑溂たる元氣に乏しい

○最後の辯論會に臨みて　三年　宮嶋岩見君
久し振りの登壇、最終の辯論會に於ける感想を述べ轉た感に堪へざる樣子が見わた人生の眞價は有意義な刻々の生活にあると論じ去つた然り、然り

○相撲部設置論　三年　長谷川毅君
經費が少くて、實行が容易で、効果が多い是非共本會に之れを設けよと主張した。唯に君のみならず此の種の論旨の底には後來の校友を憶ふ眞情が流れて居る事を想ふてうの辯論の巧拙はさてをき其情誼に感謝せざるを得ない

○斯の道を行くべし　平田部長

君の辯論に就ては最早愚評するの限りではない、唯之を最後に再び此の壇上に君の雄姿を見る能はざるを悲しみ、併せて過去一ケ年間能く本會の爲に盡されし厚意を茲に謝すのみ

○卒業と吾人の抱負　長坂副部長

當面の問題だ殊に差迫つた僕等に取つて大いに傾聽に價する問題だ、惜むべし君の後には山路愛山先生が控へられた爲時々降壇を促された、それが爲に君は幾度か躊躇し而も可惜豐富な準備の半をも果さずして壇を降りたが論旨大に聽くべきものがあつた

會員消息

○大澤國男君　二月中南佐久郡臼田森林測候所に轉任

○中田辰雄君　二月中岐阜縣益田郡下呂帝林出張所に轉任

○水上壯三君　香川縣高松小林區署に轉任

二月中森林主事に任ぜらる

○林省三君　北佐久郡岩町田小林區署に轉任

○河島憲一君　今回久原鑛業株式會社に入る事となり北海道札幌郡豐平町字定山溪、豐羽鑛山事務所に轉任

○岡西謙三君　妻籠帝林出張所へ轉任（前號野兄とあるは誤）

○吉川眞夫君　二月廿三日付にて明治神宮造營局雇（林苑課勤務月俸十七圓）を命ぜらる

林友代領收報告

金壹圓　少輪次郎君

金壹圓　園原咲也君

金八十錢　一之瀬賀裟壽君

（振替口座番號　東京一七六〇〇長野縣立木曾山林學校）

編輯局を去るに臨みて

部員三年一同

啓上、暄風凍雲を掃ひて淑氣山河に溢れ行事彌々多端ならんとするの時に方り、校友諸兄には益々御多祥の段大慶に存じ奉り候、降て不肖等諸兄の御推薦を蒙りて本部に入り、此の光榮ある使命に酬ゆべく、大なる抱負を持して立ち候へども、元より菲才、碌々として何等貢獻するところも無く、茲に無爲の一歲を回顧してただ慚愧に堪へ申さず候。

顧れば本年度初頭の豫算會に於て、代金不納の諸兄に對しては本誌の發送を停止すべし、など極論せられ、又實際に於て現狀の儘なれば、經費の關係上より何時かは畢竟斯くせざるべからざる悲運に迫り居り候ひしが、會長はじめ諸先生の御盡力と、諸兄の御同情とによりて幸にも其の歎を見ずして而も眞摯なる研究、珍らしき通信、或は所感等續々明論卓說を寄稿せられ、殊に熱烈なる本誌改善論は號を趁ふて揭げられ、林友の眞價も愈々認めらるゝ傾向之れあり、本誌の爲め喜ばしく存じ奉り候。

屢々論せられ候如く、本誌の消長は唯々校友諸兄が本誌に對せらるる情誼の度合の如何にありて、體裁の美醜、所載記事の優劣は第二の問題に有之候。

蓋し改革論の由て起る所以は、林友と林友との交渉薄らぎ、從つて所載記事が何等の興味をうゝらざる爲め、その反感に俟ふ必然の結果と存じ候、然るに價値なしとて拋棄せられず、而も進んで一般校友諸兄の反省を求むべく論究せられし熱誠に至りては只管感激措く能はざる所に之れあり候。

而して是等の明論卓說も未だ何等具体化し實現する所なきが如しと雖も、這般の論議が一般諸兄の反省を促すに充分なりしは固く信ずる所に候

校友諸兄の林友に對する反省―之れ即ち本誌改善の根本問題に候へば、この論者の續出は爰一面に於て本誌が發展の機運に向ひつつ有ることを證するものに之れ有り候

冀くは、此の自覺の上に立つて、此の熱誠を以て、校友諸兄擧つて、紙上の大活躍を試らるべく翹望に堪へ不申候

林友との沒交渉―之れぞ林友をして貧弱にせしむる根本原因にして林友に對して自己の地位を徹底的に意識せざること之が次に林友の價値をして失墜せしむる所以に候

翻て考ふるに本誌は年々無限に數十部宛增加すべくうの鵬翼の張る處も亦年を趁ふて擴大すべきは必然の事に候。されば今後に於ける當局諸員の一層の御盡力を要すべきは勿論、一般校友諸兄の御庇護に俟つことなくんば到底本誌の眞價を顯揚することは能はざるべしと存じ候。

茲に不肖等本部を去るに當り、缺陷多き一歲を顧みて慚愧に堪へず諸兄の前に謝咎し、併せて本誌に對して將來益々御情誼を垂れ給はん事を冀望致す次第に候

大正六年三月廿三日印刷
大正六年三月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫
長野市西後町丙二十一番地
印刷者　田中彌助
長野市西後町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　藤澤書店